おほほえす袖にみなとのさはく哉唐舟もよりし計に　人丸
こもり江に思心をいかてかは船さす棹のさしてしるへき　人丸

同『伊勢物語』に入被侍古仙抄歌十首

いとゝ敷過行方の恋しきに浦山敷もかへる浪かな　海原尊
いにしへのしつのをたまきくり返し昔を今に成よしもかな　人丸
玉の緒はあはせ(を)によりてむすふれは絶ての後もあはんとそ思ふ　玉乙丸
谷せはみ峯迄玉かつらたえんと君に我思はなくに　人丸
五月待花橘の香を昔の人の袖の香そする（駈紙二首不足）
百年に一年たらぬつくもかみ我を恋らし俤にたつ　文徳天皇御歌
狭筵に衣かた敷今宵もや恋敷人にあはてかもねん　巻向右大臣
岩間より生るみるめの難面は塩干塩みち貝もとめけん　天智天皇
あしのやのかた(な)の塩やきいとまなみつけをくしもさた過にけり　人丸
芦へ漕たなゝし小船いそくたひこき帰らん知人もなく

『古仙集』は、『人丸歌集』十巻也。此集の歌は、三分一者、延喜御時号『続万葉集』十巻。千首集ゑらはれたるを、被入たり。『古今集』選者のゑらはれたる『続万葉集』をは、『後万葉集』と云也。

解題

1 『和歌知顕集』　書陵部本系統（歓喜光寺蔵）

一　はじめに

鎌倉時代中期には成立していたと考えられる『和歌知顕集』は、中世の『伊勢物語』理解をよく示した書のひとつであり、その所説が後代にさまざまな影響を与えたことでも知られる。

内容は、諸本によって異同があるものの、序、『伊勢物語』の作者・諸本が生じた経緯・書名の由来・章段の解釈などを明らかにする老翁との問答、さらに登場女性名列挙や登場人物略伝（ただしこの部分の記事がないものもある）からなる。著者として平安時代の才人源経信（一〇一六―一〇九七）の名を記しているが、この点については、藤原定家の著作にこの本への言及がないことを理由に一条兼良が疑義を呈し、後人による仮託説を提唱、以後覆されることなく今日にいたっている。

この『和歌知顕集』（「伊勢物語知顕集」「智顕集」「伊勢物語知顕抄」などとも）の本文がいわゆる末書が伝えるものを含めてじつに多様であることは早くから報告されており、近年詳細も明らかになりつつあるが、それらのなかには、書陵部本系統（三条西家本系統）と松平文庫本系統（続群書類従本系統）の二つの本文系統が存在している。そのひとつ書陵部本系統については、鎌倉時代の書写と推定される写本（宮内庁書陵部蔵伝二条為氏筆本）が現存するほか、四辻善成『河海抄』や一条兼良『伊勢物語愚見抄』などがこの系統にみられる記事を引

用するといった受容を確認できる。

本書において翻字した歓喜光寺本もまた、この書陵部本系統の本文を伝える写本である。

二　書誌

まず歓喜光寺本の書誌について述べておきたい。

列帖装、一帖（六巻）。縦二四・七糎、横一七・六糎。表紙は、藍色地に金銀雲霞模様を配した紙表紙。見返しは剝落し、薄茶地に金銀切箔野毛散らしの裏見返しのみが残る。外題は、表紙中央に「和歌知顕集」と墨書した題簽を貼付。本文料紙には鳥の子紙を用いる。一面一一行書き。問答記事のうち、答者の発言にあたる部分を一字下げて記す。八括り一四七葉、墨付き一三八葉。二括り目の初一葉が欠落しているが、同一紙を用いた二括り目末一葉は、前葉に糊付されて残っている。わずかながらノドに虫損があるものの、すでに補修済み。おさめられている木箱の蓋表中央には、「竹内御門跡良鎮親王尊翰／伊勢物語知顕集／外題／竹内御門跡良尚親王」と墨書されている。

箱書に本文書写者として名を伝える良鎮は一条兼良の男。曼殊院の第二十五世門跡である。没年を永正十三年（一五一六）とも、大永五年（一五二五）ともいい、事績については赤瀬信吾氏「曼殊院良鎮とその遠景」（『国語国文』五二巻九号・一九八三年）に詳しい。それによると、数十点にのぼる仏教関係の著作をのこすとともに、文事面においても高く評価された人物であったらしい。長享二年（一四八八）九月、一条冬良の委嘱により梅枝巻を書写した『源氏物語』は、高松宮を経て現在国立歴史民俗博物館の所蔵となっている。この良鎮を本文書写者とし、外題を曼殊院第二十九世門跡良尚親王筆と伝える歓喜光寺本箱書の当否について、ただちに判断を下しうるだけの材料を得ていないが、それを措いても、書写年代はやはり室町時代と考えてよいだろう。

さて、歓喜光寺本本文には随所に書き直しが確認できる。多くは誤りを擦り消してその上から墨書しており、文字の特徴は本文筆跡に通じるように思われる。また、本文の右傍には「丶」の形で付された濁点がある。墨の濃淡が入り交じっていることから、数次にわたって加えられたものと推測されるが、正確な判別は困難である上に、それらが指し示す読みも本文読解という点では適切さにやや欠ける面もあり、翻字にあたってはすべてを省略することにした。そのほかの特徴としては、数カ所、紙面の傷みにより消えかかった文字を上から墨で補った痕が見られる。また、多く本文右側に確認できる傍記には、墨筆によるもの（異文や漢字のよみなど）と朱筆によるもの（人物注記など）の二種類が存する。奥書や識語および蔵書印などはない。

三　歓喜光寺本本文の特徴

さて、書陵部本系統最古の写本である伝二条為氏筆本については、片桐洋一氏による翻字が公刊されている（『伊勢物語の研究［資料篇］』一九六九年・明治書院）。そこで、この伝為氏筆本との比較をとおして明らかになる歓喜光寺本の特徴を指摘しておく。

まず目につくのは合計巻数の違いである。後述する最終巻記事の相違や一部に認められる脱文など、記述量にわずかな違いはあるものの、両者はいずれも、序・作者や題号論・『伊勢物語』計六十九段分の注釈・登場女性名列挙・人物略伝という同じ内容で構成されている。しかし合計巻数は、歓喜光寺本が全六巻、伝為氏筆本が全

五巻であり、歓喜光寺本が一巻多い。これは、伝為氏筆本の巻四に相当する文章を、歓喜光寺本が巻四・五の二巻にわたって記すためである。それ以外の巻の分かち方は両本で一致している。

つぎに、内容をみていくと、歓喜光寺本には文意をとりにくい次のような記事を見出せる。

風、「あふな〳〵」とは、なのあふたるとしぞ、こひもすべかりける。わが身はいやしく、人はたかく、われはいやしくて名そろはず、かげもあはねば、「名そへなし」といふとも申。（第九十三段・巻五）

和歌「あふなあふな思ひはすべしなぞへなくたかきいやしき苦しかりけり」をめぐって、相手との身分差に言及したこの注は、おのれの身分の低さが繰り返され、わかりづらいものとなっている。この箇所について伝為氏筆本は、

風、「あふな〳〵」と、名のあふたるとしぞ恋も思もすべかりける。わが身はいやしく、人はたかくなりて、なぞらへなきは、よにくるしかりけり、とよめり。又は、「名そへなし」といふは、人はたかく、われはいやしくて、名のそろはず、かげもあはねば、「名そへなし」といふとも申。（第九十三段・巻四）

と二説を並記しており、文意も明らかである。このことから、歓喜光寺本の本文には「人はたかく」という記述をきっかけに目移りで生じた脱文があることを確認できる。これが書写伝来のいずれの過程で生じたものかは不明であるが、類似表現や同一単語が近くにあったために生じたと思われる同様の脱文がほかにも数カ所存在する。

さて、両者の記事の間には、さまざまな要因によって生じたと思われる相違が認められる。藤原冬嗣（＝閑院のおとゞ）の息子達、長良、良房（＝忠仁公）、良相、良門に関する記事を次にあげよう（以下歓喜光寺本を（歓）、伝為氏筆本を（為）で示す）。

（為）されば、閑院のおとゞの御子、そのかずおはせしが、みな良の字をなのりて、よしかど、よしすけ、よしふさなどなのり給へる（を）、このかみの忠仁公は、よしの字をばかきながら、よしとはなのらで、ながらとなのりたりき。（第一段・巻二）

（歓）さは、閑院のおとゞの御子、そのかずおはせしが、みな良の字を名のりて、よしかど、よしすけ、よしふさなどなのり給へるを、忠仁公のこのかみは、よしの字をばかきながら、よしとは名のり給はで、ながらと名乗たりき。（第一段・巻二）

伝為氏筆本が忠仁公と長良を混同するのに対し、歓喜光寺本が二人の関係を史実に忠実に記すこの記事については、本来伝為氏筆本の形式であったものを、後に改めた可能性もあわせて考えなければならない。

これまで見てきたのはいずれかの誤りに由来すると思われる記事の相違であった。しかし、次に示す例はそうではない。

（為）風、「も」とは、わざわいといふ字をよめり。されば、『三教私記（さんげうしき）』といふ書にも、「となりにもあらん時はきねうたうたはざれ」とて、となりにわざわいあらん時は、わが身のなげきのやうにおもひて、いねつき哥といふもの、ないひそと也。（第四十四段・巻四）

（歓）風、「も」とは、わざはいといふ字をよめり。されば、『礼記』云、「隣有喪舂不（相）。里有殯不巻歌（けん）」とて、となりにわざはひあ覧時は、我身のなげきのやうに思て、いねへきうたといふもの、ないひそとなり。（第四十四段・巻四）

「隣有喪舂不相」にはじまる文は『三教指帰』巻上が「記云、…又云、」として引用する『礼記』巻一曲礼上の

記事だが、歓喜光寺本は出典を『礼記』とし、一方、伝為氏筆本は『三教指帰』としている。出典としてはどちらの指摘も正しいこのような記述の相違は、どのような判断によって生じたものであろうか。

以上のように、記事の相違は諸相を呈しており、一部掲出すると、次のようになる。

（巻二）

同時にあひて、伊勢国に、(為)文屋良貞といふ者ありけり。

(為)延暦廿二年

延暦廿四年、大同四年、

されば、かの奈良の京はなれける延暦三年より承和九年までのあいだをかぞふるに、

(為)淳和十年

（第二段・巻二）

弘仁十四年、天長十年。承和九年にいたるまで、すでに五十九年也。

(為)承和九年二月廿三日

（第二段・巻二）

「あめそほふる」とは、ほそくかすかにふる雨なり。この事は、承和九年二月卅日の夜、はじめてあへりし事をかけるなるべし。

（第九段・巻三）

風、「かれいゐ」といふにつきて、あまたの儀あり。あるひは、おほさゝきの御時、(為)王仁わうそむといひし物のたがりをはじめて、

(為)こゆらん

（第二十三段・巻四）

風ふけばをきつしらなみたつた山よはにやきみがひとりゆく覧

（「伊勢物語牛女共事」・巻六）

(為)ナシ

かやの御子のつかう給女　おのゝこまち

そして、両者の違いがもっとも顕著なかたちで現れているのが、最終巻の人物略伝「物語中入給人之事」の記述である。一例として光孝天皇の記事をあげると、この部分、伝為氏筆本は、

光孝天皇

仁明第三御子。世をしろしめす事、四年。仁和おなじくあり。小松の天皇と申。仁和の御門ともこの御事。せりかはの行幸はこの時也。

（巻五）

とはなはだ簡明な記述である。これに対し、歓喜光寺本は、

光孝天皇　いみな時康

仁明第三御子。世をしろしめす事、四年。仁和おなじくあり。御母贈皇大后藤沢子。紀伊守総継が女。陽成院御もののけしげくおこらせ給により、大臣以下はからひてこの御門をつけたてまつれり。五十五にて位につか(ママ)せ、八十八にてかくれさせ給。女御四人。男女御子四十一人、このうち源氏卅五人。こまつの天皇と申。仁和御門とも此御事也。せり川の行幸は此御時也。

（巻六）

と詳細に記し、明らかに伝為氏筆本と異っている。この「物語中入給人之事」については、伝為氏筆本が二十二人分、歓喜光寺本が十八人分の記事を持つ。共通する十八人分の記事のうち、天皇について述べた十一の記事において内容に違いが認められ、いずれも歓喜光寺本の方が詳細なものとなっている。

歓喜光寺本に認められるこのような詳細な記述と関連して興味深い記事を持つのが、平安時代末期、藤原資隆が鳥羽天皇皇女八条院暲子に献じたという事典『簾中抄』（冷泉家時雨亭叢書第四八巻『簾中抄・中世事典・年代記』二〇〇〇年・朝日新聞社）である。宮廷諸事に関する百科事典という性格を持つ同書には歴代天皇の略伝も記載されているが、さきの光孝天皇については、

光孝天皇治三年　いみ名時康

仁明の第三子。御母贈皇太后宮藤原沢子。紀伊守総継がむすめ。陽成院御物気しげくをこらせ給によりて、大臣以下はからひてこのみかどをつけたてまつれり。五十五にて位につく。五十八にてかくれさせ給。女御四人。男女みこ四十一人。此内源氏卅五人。小松のみかどゝ申。

（「帝王御次第」）

とあり、右に示した破線部とさきに傍線で示した歓喜光寺本の詳細記事とでは、内容と表現においてほぼ一致していると言ってよい。このことをふまえて歓喜光寺本の天皇略伝を見ていくと、それらの記事が、伝為氏筆本とほぼ一致する記事と『簾中抄』と一致する記事とをあわせもつ形で構成されていることがわかる（ただし、数カ所、伝為氏筆本にしか存在しない記事もある）。以上のことから、天皇略伝に関して歓喜光寺本が伝える記事については、伝為氏筆本に近い形の記事に『簾中抄』の記事を増補することで成立した可能性を指摘できるだろう。なお、歓喜光寺本第三十九段の淳和天皇の注には、この天皇略伝の記事を簡略化して注に組み込んだとおぼしき記述がある。やはり伝為氏筆本には認められないその記事は、歓喜光寺本にみられる独自注が形成された手法のひとつを示している。

後人の加筆による本文の改変を避けられないという性格を注釈書が持つ以上、歓喜光寺本と伝為氏筆本の注釈の相違点においていずれが古態をとどめているかについては、このような特徴をふまえつつ、他の注釈書との関係を視野に入れながら、更に精査する必要があるだろう。

四　歓喜光寺本と書陵部蔵諸本

ここまでは、伝為氏筆本との比較を通じて歓喜光寺本の特徴について述べてきたが、じつは歓喜光寺本と同様の特徴を備えた写本はほかにも数本が伝来し、同系統の本文を伝える諸本の中に一つのグループを形成している。以下、それらについて述べておきたい。

一本は宮内庁書陵部蔵阿波国文庫旧蔵本である。六巻三冊。江戸時代初期写。この本を検討してみると、巻の構成や注釈のみならず、脱文や誤写といった細部にいたるまで、歓喜光寺本と重なる箇所が多く見受けられ、両者の関係が近いことをうかがわせる。しかし、歓喜光寺本に朱筆で書き込まれていた傍注がこの本では本文に混入していることや、誤写の生じ具合を考え合わせると、本文としては歓喜光寺本のほうが良好な状態にあるといえよう。

もう一本は、最終巻奥に文明十四（一四八二）年の本奥書の記事[注1]を有する江戸時代初期の転写本（かりに文明本転写本としておく）。宮内庁書陵部蔵。上巻末に「本云、夫和歌知顕集者譜代相伝之秘本也。然而依不浅年来之競伺、去文永第二初冬之比、被優冷泉民部卿入道家之厳校之次、穴賢々々不可及外見之由再三奉契約畢。爰和州金吾聊令伝聞件本、強嗟歎之間、且甚心中被想像、不残一秘所伝覧也。正応五年八月日」とあり、このことから書陵部本系統『和歌知顕集』が鎌倉時代中期にはすでに成立していたことを示す貴重な資料として、はやくから大津有一氏、片桐洋一氏による言及がなされてきた。しかし、その際に使用された残欠本という名称が示すように、現存する同系統諸本と比較して、冒頭と途中の注釈の一部（それぞれ歓喜光寺本の巻一全文と巻三全文に対応する）を欠いており、現在は、巻名を「巻第上」、「巻第中」、「巻第下」、「巻第六」（それぞれ歓喜光寺本の巻二、四、五、六全文に対応する）とする四巻一冊本である。したがって、同本上巻末にいうような「譜代相伝之秘本」であり、藤原為家（「冷泉民部卿入道」）が所持していたという『和歌知顕集』については、不明な点が多い。ところが、この文明本転写本と歓喜光寺本を比較してみると、巻の分かち方が一致すると推定されるほか、本文にも共通する特徴が少なくない。すなわち、目移りに由来すると思われる歓喜光寺本の記事をのぞき、多少の語句の異同はあるものの、前掲の歓喜光寺本の特徴のうち、巻二、四、六に確認できるものについては、

すべて文明本転写本の巻上、中、六にも見いだせるのである。このことは文明本転写本が存在を記す為家所持本について考える上で注目されよう。もちろん、文明本転写本上巻末記事についてのさらなる検証が必要であることは言うまでもないが、為家所持本に基づく本文を伝える可能性を持ちながらも一部の記事を欠く文明本転写本、そしてそれに通じる構成と本文の特徴を備えた歓喜光寺本全六巻が、『伊勢物語』注釈史を考察する上で看過できない存在であることは間違いない。

なお、『増訂版伊勢物語古註釈の研究』補遺篇（大津有一・一九八六年・八木書店）によると、未見であるが、東山御文庫本もまた文明本転写本と同じ構成と奥書を持つ江戸初期の写本であるという。共通する特徴を備えた歓喜光寺本、文明本転写本、東山御文庫本、阿波国文庫旧蔵本という一連の写本が、今後『和歌知顕集』研究の発展に果たす役割は大きいと思われるが、その多くが江戸時代初期の写本であることを考え合わせると、室町時代の書写にかかる歓喜光寺本の存在はひときわ貴重なものと言えよう。

注

（1）「文明十四年花時中旬之候、因州在府之砌、以無量光寺上人之秘抄、於旅館之南軒、乗余暇不慮令書写之畢。依為古筆、不分明事等多之。雖然只任本摸之。相講不可有外見。穴賢々々。権中納言　藤原在判」

（藤島　綾）

［付記］翻字の御許可を賜りました歓喜光寺御住職河野良康氏にあつく御礼申し上げます。

2 『伊勢物語知顕集』　島原松平文庫本系統（鉄心斎文庫蔵）

一　諸本と該本の書誌

この系統の『知顕集』は、かつては続群書類従本系統と呼ばれていた。(注1) 対立する三条西家本系統（現在は宮内庁書陵部本系統と呼ばれている）には、鎌倉時代の書写にかかること間違いない伝為氏筆本(注2)（書陵部所蔵、函架番号　五〇九・六）があるほか、同じく宮内庁書陵部所蔵の残欠本（函架番号　一五二・九九）の上巻奥書に、本云、

夫和歌知顕集者、譜代相伝之秘本也。然而依不浅年来之競伺、去文永第二初冬之比、被優冷泉民部卿入道家之厳校之次、穴賢々々、不可及外見之由、再三互契約畢。爰和州金吾聊令伝聞件本、強嗟歎之間、且甚心中被想像、不残一秘所伝覧也。

正応五年八月日

とあるのを見ると、文永二年（一二六五）に「冷泉民部卿入道」すなわち為家の家で見たということを正応五年（一二九二）に記していて、この系統の本が鎌倉時代中期に存在していたことは疑うべくもないと思われるのであるが、対する続群書類従本系統の本は、古い写本がなく、拙著『伊勢物語の研究［資料篇］』(注3)には、江戸時代の延宝（一六七三―一六八一）頃の書写と思われる島原市松平文庫本を翻刻したのであるが、書写年代が若いだけ

ではなく、翻刻の所々に（脱落カ）などと注したように、本文にもかなりの欠脱があるので、少しでも古い本の出現が望まれていたのである。

さて、ここに翻刻する鉄心斎文庫本は、奥書に言う寛永六年（一六二九）から間もない時期の書写と思われ、(注4)島原市松平文庫本と同じく江戸時代前期の書写ではあるが、僅かながら書写年代が古く、また後述するように本文上の欠落も比較的少ないので、現時点では最高の伝本と考え、本大成の底本とした次第である。

該本は、袋綴の上下二冊本。上冊は縦二七・三センチメートル、横二〇・〇センチメートル、下冊は縦二七・二センチメートル、横一九・九センチメートル。紺地に金銀の砂子を雲紙のように撒いた紙表紙の左上方に題簽の剝落した跡がある。おそらくこの表紙が原表紙であろう。見返しは金銀泥を塗った美麗な紙に唐華亀甲文を押したものを用いている。上巻・下巻共に前後の遊紙はない。なお、上巻の第一丁（本書、九五頁上段）に見える内題は「伊勢物語知顕集巻第一」とあり、また二五丁オモテ（一一二頁下段）にも、「伊勢物語知顕集二始」とあって、「知顕集　上」（外題）「知顕集　序言」（内題）とある島原市松平文庫本や、「知顕集　上」を外題・内題とする続群書類従本とは、書名が異なっているのである。

このように、該本は一丁オ（九五頁）に「伊勢物語知顕集巻第一」とあって、「序言」が始まるのであるが、九ウ（本書一〇一頁下段）から始まる相伝記録、すなわち「和歌知顕集相伝人之事」と「立申起請文之事」があり、「隆憲法師　在判」という署名で一つの区切れをつけてから、「伊勢物語知顕集巻第一」という端作りが再び現れるのは（一〇オ、本書一〇二頁上段）、やや不可解である。そこまでは相伝に関する経緯であり、ここからが『伊勢物語』に関する「大旨」を述べるのであろう。間もなく問答体となって、これまでの叙述とは次元が違うことを示している。なお続群書類従本はここに端作りはないが、島原松平文庫本は「知顕集巻上」と端作りしている。

その後、二五丁オモテ（本書一一二頁下段）に「伊勢物語知顕集二始」という端作りがあって初段の注釈が始まる。島原市松平文庫本や続群書類従本では、「知顕集　巻中」と記している。

そして、上巻最終丁（本書一三〇頁上段）には、

右之本も、しかと不知所候へ共、推量にうつし置候。文字、
又かなづかひ、ちがひ候共、本のごとくにて候まゝ、努々あや
まりにてはあるまじく候也。

寛永　五月吉日

かきをくもかたみとなれやふでのあと
われはいづくのうらにすむとも

という書写奥書がある。

次に下巻だが、一オ（本書一三一頁上段）には、「伊勢物語知顕集三」という端作りの後、第十七段の注釈が始まる。それに対して、島原市松平文庫本と続群書類従本では、鉄心斎文庫本の下巻・一四丁ウラの一一行目と一二行目の間に、すなわち本書一四二頁の第二十八段と第二十九段の間で中巻が終わり、「知顕集巻下」（島原本）、「知顕抄　下」（続類従本）という端作りをして、第二十九段の注釈を始めるが、この鉄心斎文庫本では下巻二十八オモテの三行目の本文に続けて、やや小さく「伊勢物語知顕集三終」と記す（本書一五四頁下段）。しかし、「伊

勢物語知顕集巻四」の端作りはない。

なお、下巻の最終丁（本書一七六頁）には、

右之本も、不知所候まゝ、文字并かなづかひちがひ候共、
推量にうつしをき候まゝ、努々あやまりにては有之
まじく候也。

寛永六つちのとみの年　五月吉日

という書写奥書を記す。

このように、この鉄心斎文庫本は、続群書類従本や島原市松平文庫本が持っている相伝系図や起請文を持つことによって、続群書類従本や島原市松平文庫本の系統に属することははっきりしているが、形態的に見ると、巻の区切りなどは、続群書類従本や島原市松平文庫本とかなり異なっていることがわかるのである。

次に本文について続群書類従本や島原市松平文庫本と詳しく比較検討する中で、この鉄心斎文庫本の特徴を明らかにしてゆこうと思う。

二　鉄心斎文庫本『伊勢物語知顕集』の本文

まず、鉄心斎文庫本と島原市松平文庫本・続群書類従本について、その端作りを含む冒頭部分を比較してみよう。

まず、鉄心斎文庫本では、

伊勢物語知顕集巻第一
序言　　大納言源経信作

夫、和歌者、人の心を胤として、よく人の心をやはらぐる故に、隠遁の源として、菩提をもとむる初なり。まづ、極楽に、歌舞のぼさつまします。天ぢくに陀羅尼のことばあり。漢土に詩賦をつくる、それ、むくさに分れたり。中にも我国の風俗として、神世上代のむかしより、末世の今にいたるまで絶ず。その初をたづぬれば、ひさかたのあめにしては、したでるひめにはじまり、あらかねのつちにしては、そさのおのみことよりぞ起ける。しかれども、あめにしては、ことばもこはく、心かはるなりき。つちにしては、文字もさだまらず、句をかぎらざれば、これかれかよはしてしりがたし。そのゝち神武天皇の御時より、よろづ神々を所々にいはゐたまひけるに、おさ（ママ）のおのみことを出雲の国蘇我里にいはひたてまつりしに、この御子、女とすみたまはんとて、宮造りしたまふ。かのところに、八色の雲のたちけるをみて、めでつ（ゝ）よみたまへる。

とある。それに対して、島原市松平文庫本では、

知顕集序言　　大納言源経信作

それやまとうたは、人のこゝろをたねとして、よく人のこゝろをやはらぐるゆへに、いんとんのみなもととして、ぼだいをもとむるなり。まづごくらくにかぶのぼさつ御ざあり。てんぢくにだらにのことばあり。かんどにしふをつくり、それ、むくさにわかれたり。中にわがくにのふうぞくとして、かみ世じやう代のむかしより、まつ世にいたるまでたへず。それをたづぬれば、ひさかたの空にしては、あまつおとめよりぞおこりける。しかれども、そらにしては、ことばもよはく、こゝろかすかなり。きり（ママ）にしては、もじもさだまらず、くをか

ぎらざれば、かれこれかよはしてしりがたし。そのゝち、じんてんわうの御ときより、よろづかみ〴〵をしよ〴〵にいはいたまいけるに、いづものくにそがのさとにいはひたてまつりしに、このみこ、おんなとすみたまはんとて、みやつくりたまふ。かのところには、八いろのくものたちけるを見めでつゝよみたまへる。

というように、同系統の本文であることは疑いないが、誤写に由来すると思われる異なりが随所に散見されるのである。

ここまでは小さな相違であったが、次にかなり大きく異なる場合を例にあげよう。まず島原松平文庫本では次のようにある。

つぎに、うた、六ていあり。すなはち、たんか、ちやうか、せんどうか、こんぼんか、くわいぶんか、はいかいうた。

まづ、たんかといふを一しゆとさだむる也。かるがゆへに、たんかといふて、これには、かみしものくもさだめず、いはんや五だいごこんとあたること也。このうたのすがたは、いくつのくをかぎるともなし。たゞいくらにてあれ、いひつゞくるなり。

つぎに、ちやうかといふは、もんじを三十一じにさだめ、くを五くにわかつなり。五くといふは、さきにいひつるごとく、ち・すい・くわ・ふう・くうの六だいは、さとりのまへには、六だうのほう・ほつ・じんぶつとあらはれ、まよひのまへには、ぢごく・がき・ちくしやう・しゆらと、にんてんのちまたとなる。これをあてるときは、さかさまにあたるなるべし。

たんかをばてんだうにあて、ちやうかをばにんだうにあて、せんどうかをばがきだうにあて、こんぼんかをばちくしやうだうにあて、はかいうたをばぢごくだうにあてらるゝなり。

これに対して、本書に収めた鉄心斎文庫本（九七頁上段）を見ると、

次、歌に六体あり。すなはち、短歌、長歌、旋頭、混本の歌、廻文歌、誹諧歌なり。

まづ、短歌といふは、うたの句を二つにさだめて、五七とも七五とも十二字を一しゆとさだむるなり。故に、短歌といふ。これには上下の句もさだまらず。いはんや五体五根と当ることなし。このうたのすがたは、いくつの句をかぎるともなし。たゞいくらもあれ、いゝつゞくるなり。

次に、長歌といふは、文字を三十一字にさだめ、句を五句にわかつなり。五句といふは、さきにいひつるがごとく、地・水・火・風・空の五輪なり。そのすがたは、

梅花それともみえずひさかたのあまぎる雪のなべてふれれば

といへり。第一の五文字を頭句といふ。これは空なり。第二の七文字をば首句といふ。これは風なり。第三の五字をば胸句といふ。これは火なり。第四の七字をば腰の句といふ。これ水なり。第五の七字をば尾句といふ。これは地なり。これをははり（ママ）のなるべし。衆生の体にのぞめるときは、足の句などに当るなり。この長歌を三十二相になぞらへつる、真実の歌の本とはおもふべし。五句一の心ともにかけざれば、すなはち五根五力のほとけをつくる。百のうたをよめば、百のほとけをつくる。千歌をよめば、千仏をつくるなり。上句、若、難あれば、頭の病といふ。中句病あれば、首の病といふ。下句たゝりあれば、こしの病といふ。尾病といふ。上下の句わたりてぶくなれば、腰をれ歌と云なり。故に、心得ずしてあしきうたをよみつれば、六根まつたからず。五体さだかならず。くるしみある衆生を造るゆへに、いまだ輪廻をはなれぬ歌とかなしみて、よく〴〵さ

はくりなをすべきなり。

次、旋頭歌といふは、五句のほかに、五句字にても七字にても、句を一句読具せるなり、たとへば、

か（の）をかにくさかる男子（おのこ）しかなかりそありつゝもきみがきまさんみまくさにせん

とよめり。「ありつゝも」といふ一句をよみ具したり。

次、混本歌といふは、五句のうちに、五字にても七字にても、一句よみたらざるなり。たとへば、

ゆふかげまたでちりやすきたゞあさがほのはなのなぞかし

これ、はじめの句を一句よまざるなり。

次に、廻文歌といふは、三十一字の歌をさかさまによむにも、同心同詞によまるゝなり。たとへば、

むらくさのくさのなはもしそなはらばなぞしもはなのさくにさくらむ

といへり。

次、誹諧歌といふは、三十一字の歌の詞を、きやうじ、たはぶれたる心によめるなり。たとへば、

人にあはんつきのなきよはおもひをきてむねはしりびに心やけけり

といへり。

これらの六体は、さとりのまへには、六道のほう法身仏と現じ、迷のまへには、ぢごく、がき、ちくしやう、しゅら、人天の陌となる。これを当るときは、さかさまにあつるなるべし。短歌をば天道にあて、長歌をば人道にあて、旋頭をば修羅道にあて、廻文歌をばがきだうにあて、混本歌をばちくしやうだうにあて、誹諧歌をばぢごくだうにあつるなり。

とある。前と後の傍線を施した部分は島原松平文庫本と一致するが、中間の傍線のない部分は島原松平文庫本になく、続群書類従本にもない。島原松平文庫本の系統の脱落は、鉄心斎文庫本では見開きの二頁と六行に相当するから、おそらくは親本の見開き二頁分を飛ばして書写したために脱落したと考えられるのである。

これは、非常に長大な相違であったが、小さな相違ならば、ほかにも多くある。

たとえば、鉄心斎文庫本（本書一〇七頁上段）には、

答、その事なり。たとへば、いせが、先、寛平三年に、この物がたりをとりいださんとてしけるに、狩の本をみいだしてければ、さきに申つるがごとく、いせ、わが事を入たるところをば、みな、こと物がたりのさにたるにかきかへて、よにとりいだしてければ、ときの御門、これをさらにいせがつくりたる物ぞとおぼしめして、御かんありて、殿上（てんじやう）にて、さはくり御本をうつしとゞめてけり。（後略）

とあるのに対して、島原松平文庫本や続群書類従本では（引用は島原本）、右の鉄心斎文庫本の本文に傍線を付した部分だけが、

こたふ、そのことなり。たとへば、いせが、まづ、くわんぺい三ねんに、このものがたりをとりいだしてければ、ときのみかど、これをさらにいせがつくりたる物ぞとおぼしめして、ぎよかんあつて、てんじやうにて、さはくり御ほんうつしとゞめけり。

と書かれていて、傍線を引いた始めの部分と終わりの部分は一致するが、島原松平文庫本は、中間部を抜かして書写していることがわかる。おそらくは傍線を施した部分の後と前にある「とりいださんとて」から「とりいだしてければ」に目移りして、その間を欠脱してしまったのであろう。

同じような例になるが、鉄心斎文庫本（本書一一一頁上段）では、

かゝるあひだ、このさいし、これをきくに、かたちうするとはいへども、いまはなつかしくなりぬ。

とあるが、島原松平文庫本では、

かゝるあひだ、このさいし、これをきくに、かたちことなりといへども、いまはなりぬ。

となっていて、鉄心斎文庫本の傍線部分「なつかしく」を脱しているし、鉄心斎文庫本（一一五頁下段）では、

いづれも、このものがたりは、ふしんなるなかに、ことにおぼつかなし。そのゆへは、まづ、ことばに、「うまじかりける女」とは、なに事ぞや。

とあるのが、島原松平文庫本では、

いづれも、このことばに、うまじかりけるをんなとは、なにごとぞや。

としかなく、鉄心斎文庫本の傍線部が欠脱しているのである。

このような欠脱は下巻にも所々に見られる。

第十九段、鉄心斎文庫本（本書一三三頁下段）では、

わがいるやまのかぜはやみとは、またおとこのかよふは、すさまじとよめり。やまのかぜのはげしきとは、すさまじきものなれば、かくたとへたり。

問、また、かよひけるおとこは、たれ人ぞや。

答、これは、みなもとの至といふ人なり。かすがの里にありしとき、なりひら、三とせこざりしに、新枕（にいまくら）してかよひそめたりしかば、かく京にしても、おり〳〵ひまごとにかよひけるなり。

とあるが、島原松平文庫本では、

わがいる山のかぜはやみとは、またおとこのかよふは、すさまじとよめり。やまのかぜのはげしきは、すさまじき物なれば、かくたとへたり。

こたふ、これは、みなもとのいたるといふなり。かすがのさとにありしとき、なりひら三とせこざりし、にいまくらしてかよひはじめたりしかば、けうにしても、おり〳〵ひまごとにかよひけるなり。

となっていて、鉄心斎文庫本の傍線部の「問」の部分が欠落して、「こたふ」の部分に直接続いているのである。

次は第四十三段、鉄心斎文庫本の下巻（本書一四九頁上段）、

これは、ほとゝぎすに、女をたとへて、かよふ人のおほければ、おもひながらうとみぬ、とよめり。返事なれば、いほりあまたとは、かよふ人おほくあり、さればうとまれぬとなり。

とあるが、島原松平文庫本などでは、

これは、ほとゝぎすに女をたとへて、かよふ人のおほければ、おもひながらうとみぬ、とよめり。うとまれぬとなり。

とあって、鉄心斎文庫本に施した傍線の部分を脱しているのである。

もう一例、第六十九段の場合を見よう。鉄心斎文庫本（本書一六一頁下段）では、

答、かち人のわたれどぬれぬ江とは、ちぎりなり。されば、かちなる人のわたるに、ぬれぬほどの江とは、あさき江なり。その江に縁（ふち）の字（じ）をそへて、あさき縁のちぎりかな、といへるなり。そのさかづきのさらに、ついまつの墨（すみ）して、うたのするをかきつゞくといふは、さかづきのさらとは、さかづきの尻居なり。つい松（まつ）のすみ

とは、たいまつのきえずみなり。た・ち・つ・て・との五いんにひかれて、ついまつとは、かきたるなり。

とあるが、島原松平本では、

こたふ、かち人のわたれどぬれぬほどのあさき江也。その江に、ゑんのじをそへて、あさきせのちぎりかなといへる也。そのさかづきのさらに、ついまつのすみは、たいまつのきえずみなり。たちつてとの五いんにひかれて、ついまつとは、かきたる也。

とあって、やはり鉄心斎文庫本の傍線部を欠脱しているのである。

以上は、書写時における丁飛ばしや目移りによって、島原松平文庫本や続群書類従本が本文を失った例であるが、それとは次元の違う本文の出入りも見られる。

島原松平文庫本や続群書類従本では、第四十六段から第四十九段まで、本文も注釈もないが、この鉄心斎文庫本では、第四十九段として（本書一五一頁下段）、

問、むかし、おとこ、いもうとのいとおかしげなるを、ことをしらぶとて、みおりて、といへり。おかしげなるとは、なにと心うべきや。

答、おかしげなるとは、よきなり。ものおかしきとは、心にかなひて、興（けう）ある事なり。

とあるのが注意される。

初段から最終段まで、ここを除けば、島原松平文庫本や続群書類従本と鉄心斎文庫本は、段の出入りと段序がまったく一致しているから、この段の場合は、既に述べてきた例と同じように、島原松平文庫本系統の書写時における誤脱と見るのが自然であろうが、実は、内容的にも、無視できない問題を含んでいる。

すなわち、この段は、いわゆる広本系、略本系を含めて、通行の本は、

むかし、おとこ、いもうとのいとおかしげなりけるを見をりて、

うらわかみねよげに見ゆるわか草をひとのむすばむことをしぞ思

ときこえけり。返し、

はつ草のなどめづらしきことのはぞうらなく物を思ける哉　（定家本系天福本）

とあるが、傍線の部分、「いもうとのいとをかしげなるきむをしらぶとてみをりて」（時頼本、伝後醍醐天皇宸翰本）「いもうとのをかしげなるきむをしらぶとて」（伝為明筆本）「いもうとのいとをかしききんをしらべけるをみて」（最福寺本）というように、いわゆる古本とか別本と呼ばれている本だけが「妹が琴を弾いた」と述べている。「在五が物語を描きて、いもうとに琴（きん）教へたるところの『人のむすばむ』といひたるを見て……」とある『源氏物語』総角の巻の記述と深くかかわっているのであるが、既に述べたことがあるように[注5]、定家本系諸本と広本系諸本の中間に位置して定家本成立の基盤になった別本の類に含まれる最福寺本・時頼本・伝後醍醐天皇宸翰本・伝為明筆本が、定家本系統にも非定家本系統にも見られない本文を持っていたとは考え難く、おそらくは、『源氏物語』総角の巻の記述によって改竄された本文であろうと思われるのである。

それはともかく、前掲最福寺本・時頼本・伝後醍醐天皇宸翰本・伝為明筆本の書写年代にあたる鎌倉時代末期から南北朝期に成立したと思われるこの系統の『知顕集』が、このような本文を持っていたことは不思議ではないのである。

三　九州大学音無文庫の『伊勢物語知顕集』

ところで、以上に述べて来た鉄心斎文庫本『伊勢物語知顕集』の本文の特徴のおおむねは、藤島綾氏によって紹介された九州大学附属図書館音無文庫本『伊勢物語知顕集』[注6]と非常に近い。

同本は、元文五年（一七四〇）四月の写本を宝暦十二年（一七六二）に書写したもの。「知顕集　上下」と外題した一冊本であるが、内題は鉄心斎文庫本と同じ箇所に「伊勢物語知顕集巻第一」（本書九五頁上段参照）、「伊勢物語知顕集巻第一」（本書一〇二頁上段参照）、「伊勢物語知顕集二始」（本書一一二頁下段参照）、「伊勢物語知顕集三」（本書一三一頁上段参照。ただし「伊勢物語知顕集」とのみあり）、「伊勢物語知顕集三終」（本書一五四頁下段参照。ただし次段に「伊勢物語知顕集」とのみあり）というように、小異はあっても、同じ箇所に記されており、両者が同系の伝本であることは形態面からも確認される。ただし、本文は江戸時代後期の写本にふさわしく漢字があてられることが多く、また右の問題にかかわることを言えば、端題と尾題が入り混じっているのに困惑したのか、「伊勢物語知顕集」とのみ記して、巻数を書いていないというように、書写者の思惑が本文のありように反映しているらしいことが注意される。

さて、前述したように、この九州大学本は、鉄心斎文庫本と一致する点が最も多い本であるが、異なっている点も全くないわけではない。

まず第二十三段の末尾近く、鉄心斎文庫本（本書一三八頁下段）では、

答、このしらなみといふは、まことのなみにあらず。ぬす人を、しらなみといふなり。そのゆへは、むかし大（たい）こくに、二人のぬす人の長本在き。一人は、くもはなたちそいろいこまやまのやまをきみがゆくゑそなたのやまとみゆるばかりと、よめり。

とあり、島原松平文庫本でも、

こたふ、このしらなみといふは、まことのなみにあらず、ぬす人を、しらなみといふなり。そのゆへは、むかし、たいこくに、二にんのぬす人の長本ありき。一にんは、くもはなたちはいろ、いこま山をだに、きみがゆくへそなたのやまとみるばかりと、よめり。

とあるが、両本とも、終りの方に脱落があるのか、混乱して意が通じない。

しかし、九大音無文庫本を見ると、

此白波と云は、誠のなみにあらず。ぬす人をしら波と云也。其故は、むかし大国に二人の盗人の長本ありき。一人は山立の長本也。名をば緑林と云。一人は海賊の長本也。名をば白波と云。但、緑林は、山にては手もきゝ、心もきゝたりたりけるが、里海にに出ては心もきかざりけり。しら波は、海にても、里にても、ゆゝしき長本なりければ、これよりして、盗人の惣名を白波と云なり。しら波と云事をたよりにして、「をきつ」の言葉をそへたる歌なり。又、ぬす人のある山はさはがしければ、「風ふけば」と此歌にをきてよめるなり。風の吹は、さはがしき事なり。

問、まれ〳〵彼高安の郡に来てみれば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて手づからいゝがいとりてもりけるをみて、心うがりていかず成にけり、と云り。いゝがひとはなにものぞや。

答、いゝがひとは、飯もる板の名也。此板は、いゝをもる時、かならず水にさし入て要にあふ物なれば、舟こ

ぐかひのかたちに作たるゆへに、いゝがいとは云り。又、けことは、家の内にさだまりて有人のかず也。うつはものとは、ひきれ也。

問、さて、又、歌に、

君があたりみつゝをらなんいこま山雲なかくしそ雨はふるとも

と云り。是は、何といふ心ぞや。

答、是は、河内国にいこま山といふ山あり。此山に雲だにもかゝりぬれば、日をもへだてず。やがて雨のふる也。されば、此歌よめる。雨と云は、我なみだのあめなれば、涙の雨は降れども、雲はなたちそひそ、いこま山をだに君が行ゑそなたの山とみるばかりとよめり。

とある。傍線を施した冒頭部分と末尾部分は島原松平文庫本や鉄心斎文庫本とおおむね一致するが、かなり長大な中心部分は他本にない。おそらくは、書写にあたって、二丁を重ねたまま改丁して、見開き一丁分を脱落してしまったものと思われるのである。

この例を見ると、九大音無文庫本が鉄心斎文庫本に先行し、この系統の『伊勢物語知顕集』の中で最も古いと言えそうに思われる。しかし、実は、そうとも言い切れないのである。

第六十九段の場合、鉄心斎文庫本（本書一六〇頁上段）では、

つかひざねとは、かねて申つるやうに、むかしよりいせのくにへくだるかりのつかひのなかには、なりひらばかり、正しき王孫にてくだりたる人な（か）りければ、さねとあるつかひとかきたり。われてあはんとは、こは、きわらはゝ、たれぞ。また、ね一より、うし三とは、いかなる事ぞや。

答、を（さ）なきわらうべ、わらはなり。これは、いせのかみ、ふぢはらの継陰がむすめなり。なをば、よひとのまへといふ。ことし、九さいにはなりける。これは、いせがおさなかりしときの事なり。また、ね一より、うし三といへるに、しさゐあり。そのゆへは、さいくうわたらせ給ふところに、時定人ありて、一ときを、四つにわりてはからふに、あぶらにても、みづにてもあれ、これをもらして、そのときをはからふ事あり。しかるに、一ときを四つにわけて、はじめの一には、鼓を一巻て、辰の一点とし、二ばんには、鼓を二巻、たつの二点とし、三ばんには、三巻、たつの三点とし、四ばんには、四巻て、たつの四点と

は、まさにいたうあはじともおもはぬなり。女のかたより、なをすゝみてあはゞや、とおもひけるなり。

問、月のおぼろなるに、みれば、ちいさき童を前にたてゝ人たてり。かぎりなくうれしとおもひつゝ、わがぬるところにいれて、子一より、丑三まで、物がたりしてあるに、まだなに事もかたらぬに、といへり。おさなきわらはゝ、たれぞ。また、ね一より、うし三とは、いかなる事ぞや。

答、を（さ）なきわらうべ、わらはなり。これは、いせのかみ、ふぢはらの継陰がむすめなり。なをば、よひとのまへといふ。ことし、九さいにはなりける。これは、いせがおさなかりしときの事なり。また、ね一より、うし三といへるに、しさゐあり。そのゆへは、さいくうわたらせ給ふところに、時定人ありて、一ときを、四つにわりてはからふに、あぶらにても、みづにてもあれ、これをもらして、そのときをはからふ事あり。しかるに、一ときを四つにわけて、はじめの一には、鼓を一巻て、辰の一点とし、二ばんには、鼓を二巻、たつの二点とし、三ばんには、三巻、たつの三点とし、四ばんには、四巻て、たつの四点と

とある。

それに対して、九州大学音無文庫本では、

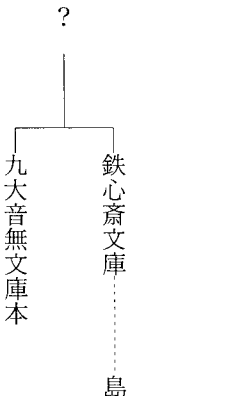
使ざねとは、兼て申つるやうに、むかしより伊勢国へくだるかりの使の中には、業平ばかり正き王孫にてくだりたる人なければ、さねと有使と書たり。辰の四点と知り、かやうによる昼十二時を四づゝに分て、四十八時を作りて出す也。然に、業平と斎宮と物語かたり給へる事、子の時のはじめより、丑の時の三点まで物がたらいて、帰りける也。是をかんがうるに、一時半過て二時に及りける也。まだ何事もかたらはぬとは、たゞ物語ばかりのいろとにてあるよし也。

というように、前掲の鉄心斎文庫本に傍線を施した部分だけになっていて、傍線を施さなかった、かなり長大な中間部分を抜かして書写しているのであって、この場合は、本書に翻刻した鉄心斎文庫本の方が、九州大学音無文庫本に先行しているとも言えるのである。

このように、鉄心斎文庫本と九州大学音無文庫本は、島原松平文庫本や続群書類従本よりも、脱文が少なく、本来の形をより多く伝えていることは確かながら、鉄心斎文庫本と音無文庫本はそれぞれに独自の欠脱本文を持っていて、いずれかが、いずれかに先行しているとは断じ得ないということがわかるのである。

かつて続群書類従本系統と島原松平文庫本系統と呼ばれて来たこの系統の『知顕集』諸本の関係を図示すると、次頁のように整理されると思う。しかし、これは〔諸本系統図〕ではなく〔諸本関係図〕であって、本と本をつなぐ……は直接関係を示すためのものではなく、それぞれの位置関係を確認するためのものであることを、特に断っておきたいと思うのである。

〔諸本関係図〕



四 『伊勢物語知顕集』の性格

ここに一括した系統の『知顕集』は、既に何度も述べているように[注7]、宮内庁書陵部本系統『和歌知顕集』と対立するものであるが、該本冒頭の九五頁上段から一〇一頁上段・六行目の「ひすべし、〳〵」までを、宮内庁書陵部本系の『和歌知顕集』の冒頭「序詞言」と比べると、和歌の六義や四病の叙述に、該本が例歌を加えたりしているが、大筋はほぼ一致している。

ただし、それに続く（一〇一頁上段・七行目）、

そも〳〵すみよしの古人の聞あつめたりし事を、もらさずしるしをく故に、『和歌知顕集』等となづけたり。

から後、一〇一頁下段・最終行近くの

仍、いしゆ如件。

隆憲法師在判

までは、該本の系統にしかない部分であるが、この部分に三か所も『和歌知顕集』という題号が記されていることが注意される。そもそも宮内庁書陵部本系統の諸本は内題・外題ともに、おしなべて『和歌知顕集』と記すのに対して、該本をはじめ。この系統の島原市松平文庫本・続群書類従本・九大音無文庫本には、この部分にしか『和歌知顕集』の名は見えず、外題や内題は『伊勢物語知顕集』『伊勢物語知顕抄』『知顕集』『智顕集』などと記されているからである。つまり該本の系統の『知顕集』は、書陵部本系統の『和歌知顕集』の別伝として伝えられたというタテマエをとっていると思われるのであるが、このことを如実に示しているのは、書陵部本系統にはまったく見られない「『和歌知顕集』相伝人之事」（一〇一頁下段）と「立申起請文之事」（一〇一頁下段）が、今問題にしている鉄心斎文庫本・九州大学音無文庫本・島原松平文庫本などの独自部分の結びに置かれていることである。

ここにそれを示せば、

『和歌知顕集』相伝人之事

大納言源経信朝臣　木工頭源俊頼朝臣　俊恵法師　寂蓮法師

従二位藤原家隆朝臣　遠所女房　隆専法師　隆憲法師

立申起請文之事

右件、元者　山、『和歌知顕集』をつたへて、かの序詞のごとくに三器量をえらびて、一人、二人、もしは三人よりほか、これをつたうるものならば、すみよし・たまつしまのみやうじん、人丸、赤人、ことには、そさのお・かすが大みやうじんの御にくまれを、あつく、ふかくかうむりて、ながくもとむるところの歌道にまよひ、つゐには三悪道におつべきものなり。仍、いしゆ如件。

隆憲法師在判

とある。

島原松平文庫本と続群書類従本では、「相伝系図」と「起請文」の人名はすべて仮名で書かれていて、混乱もあるが、鉄心斎文庫本と九大音無文庫本では、すべて漢字で書かれていて、わかりやすい。

ところで、この「相伝系図」を見て、まず気づくことは、経信、俊頼、俊恵、寂蓮、家隆と続き、鎌倉時代初中期においては、歌道相伝の正統であった御子左家からは全くはずれていることである。「遠所女房」を後鳥羽院に従って隠岐へ渡った女房と解すれば、定家ではなく家隆の系統の伝書ということになる。つまり、御子左家流一色で、ことごとに「定家の余風」を標榜するのが一般的であった鎌倉中後期から南北朝期において、あえて非定家流であることを示すべく、家隆の流と称して「秘説」を相伝している姿勢に注目したいのである。なお、起請文を書いた「隆憲法師」[注8]も、相伝者の「隆専法師」も、同名の僧はいるが、別人であろう。おそらくは鎌倉時代の後期に東国を巡遊して歌道相伝を行なっていた歌僧[注9]の中の一人であったかと思うのである。

注

（1）大津有一『伊勢物語古注釈の研究』（昭和二十九年、石川国文学会刊。増訂版は昭和六十一年、八木書店刊）

（2）片桐洋一『伊勢物語の研究［資料篇］』（昭和四十四年初版、明治書院刊）に翻刻した。

（3）注2参照。

（4）該本を始めて紹介した『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊　九』（平成十三年、八木書店刊）の解題では、奥書の年代より少し後の正保・慶安頃（一六四四―一六五二）頃の書写の可能性も考えたが、遅くても寛永年中（一六四三まで）とすべきであろう。

（5）『伊勢物語の新研究』（昭和六十二年、明治書院刊）の第五篇第一章

（6）藤島綾「九州大学蔵『知顕集』について」（『語文研究』第七十三号、平成四年六月）

〈翻刻〉「九州大学音無文庫蔵『知顕集』（一）」（『文献探求』第二十八号、一九九一年九月）

〈翻刻〉「九州大学音無文庫蔵『知顕集』（二）」（『文献探求』第二十九号、一九九二年三月）

（7）片桐洋一『伊勢物語の研究［研究篇］』（昭和四十三年初版、明治書院刊）のほか、注2、注4など参照。

（8）井上宗雄『中世歌壇史の研究　南北朝期』（明治書院、一九八七年改訂新版）一四頁

（9）この時代の地方の歌学相伝における歌僧の役割は、次の時代の連歌師に相当するほどに大きい。たとえば、従来為家撰かと言われていた『後撰集正義』も、このような歌僧の所為であったかと思われる。藤川晶子「『後撰集正義』の成立」（『和歌文学研究』第七十七号、一九九八年一二月）参照。

（片桐洋一）

3　『伊勢物語難儀注』（冷泉家時雨亭文庫蔵）

一　冷泉家時雨亭文庫蔵『伊勢物語難儀注』について

本書において底本とした冷泉家時雨亭文庫蔵『伊勢物語難儀注』は、縦二一・〇センチ、横一三・五センチの楮紙袋綴じ一冊本である。表紙は本文料紙と同じで、左上方に直書きで「伊勢物語難儀注」と記す。墨付五十四丁、一面九行書き（目録の一オのみ一面八行）。遊紙一丁のあと目録（三ウ3行目まで）があり、目録の後、丁を変えずに「伊勢物語難儀注」と端作りして本文に入る。本文は「むかし、なりひら、へいぜいてんわう第四のわうじ」（三ウ5行目）から始まるが、この部分は、天理図書館本・桃園文庫本・鉄心斎文庫本では「業平氏文の次第」という見出しが付いており、該本はこの見出しを欠いている。また、目録は「『伊勢物語』といふ事」から始まっており、この「業平氏文の次第」とともに、これに続く「をなじ時代の人々の事」「をなじ時大内女房たちの事」の合わせて三項目を欠いていることになる。一方、三十七番目の項目にあたる「みけしのころも」は、目録には記されているにもかかわらず、本文中に見出せないが、前項目「仁和の中将」の「仁和とは、二人の皇といふこゝろなり」に続く「手ををりてへにけるとしを」以下の記述は、諸本いずれも「みけしのころも」の項目の記述であり、該本は「みけしのころも」の見出しとこの項目の冒頭数行文を誤脱していることになる。本文中では見出しのみを（　）を付して補った。注釈本文は五二ウまでであるが、五三オから五四オまで「和歌

制詞　今之世歌不可読事少々」（為家の『詠歌一体』からの引用）を付録として加える。五四ウから五六ウまでは白紙。奥書はなく、伝写経路は不明であるが、室町時代中期から後期の書写と見られる。

なお、該本は親本を忠実に書写したものとおぼしく、たとえば、「おとこのかはちへかよふを」は「おとこのかはちへかよふを」と改められそうであるが、「本ノマヽ」と傍書してそのまま記し、「みやび」の誤写と思われる「みや人といふ事」も「本ノマヽ」「び歟」と傍書してそのまま記すように、容易に訂正できそうな場合や不審がある場合でも改めることをせずにそのまま書写している箇所が数多く見られる。「本ノマヽ」と傍書している箇所は全体で十四箇所に及ぶ。

二　『伊勢物語難儀注』の諸本

『伊勢物語難儀注』諸本のうち、宮内庁書陵部蔵本[注1]は、江戸時代前期に霊元天皇の勅命によって冷泉家時雨亭文庫蔵本を忠実に書写した写本である。一面十二行書きで字配りは異なるが、漢字・かなの区別、仮名の字母もほとんど一致し、前述したような冷泉家時雨亭文庫蔵本の欠落や「本ノマヽ」の傍書もそのまま書写している。このほかに管見に入った伝本は、①山本登朗氏蔵本、②天理図書館蔵本[注2]、③東海大学桃園文庫蔵本[注3]、④鉄心斎文庫蔵本[注4]、の四本である。①は江戸時代前期の書写。内題、外題ともに「伊勢物語秘夾抄」とある。②は室町時代後期の書写。上下二冊。内題、外題ともに「伊勢物語難儀抄」とある。③は江戸時代前期の書写。内題に「伊勢物語秘注事」とある。④は江戸時代前期の書写。内題に「伊勢物語難儀注」とある。

現存する『伊勢物語難儀注』は五類六本ということになるが、これらの諸本の項目を対照させると次の表のようになる。

時雨亭文庫本	山本登朗氏蔵本	天理図書館本	桃園文庫本	鉄心斎文庫本
1（業平氏文の次第） 2をなじ時代の人々の事 3をなじ時大内女房たちの事 4『伊勢物語』といふ事 5五節中将といふ事 6うゐかうぶり 7かいまむ 8なかめくらしつ 9月やあらぬ 10むぐらのやど 11ひじきもの 12とぶほたる 13むさし野 14あづさゆみ 15をに一くち 16あくた川 17つゝゐづゝ 18かぜふけば 19ぬきす	4（『いせ物語』といふこと） 5五節中将 6うゐかうぶり 7かゐまみ 8なかめくらしつ 9月やあらぬ 10むぐらのやど 11ひじき物 12とぶほたる 13むさし野 14あづさ弓 15おに一口 16あくた川 17つゝ井筒 18風ふけば 19ぬきす	1業平うぢもんの次第 2をなじ時代の人々 3同時代の女房たち 4『伊勢物語』といふ事 5五節の中将 6うゐかうぶり 7かいまむ 8なかめくらしつ 10むぐらのやど 11ひじきもの 12とぶほたる 16あくたがは 15をに一口にくひてけり 20つげのをぐし 19ぬきす 14あづさゆみ 9月やあらぬ 17つゝゐづゝ	1業平うぢもん次第 2同じ時代の人々 3同時代大内女房達 4『伊勢物語』 5五節中将 6うゐかぶり 7かいまむ 8なかめくらしつ 10むぐらのやど 11ひじき物 12とぶほたる 16あくた川 15鬼一口 20つげのをぐし 19ぬきす 14あづさ弓 9月やあらぬ 17つゝゐづゝ	1業平の氏文の次第 4『伊勢物語』 5五節中将 6うひかぶり 7かいまむ 8なかめくらしつ 10むぐらのやど 11ひじき物 12とぶほたる 16あくた河 20つげのをぐし 19ぬきす 14あづさ弓 9月やあらぬ 17つゝいづゝ

20つげのをぐし	20つげのをぐし	18かぜふけば	18風吹けば	18風ふけば
21ゆめうつゝ	21夢うつゝ	23たのむのかり	23たのむのかり	23たのむのかり
22あさきえ	22あさきえ	25あねはのまつ	25あねはのまつ	2業平同時代の人々
23たのむのかり	23たのむのかり	34つくもがみ	34つくもがみ	3同時代の女房
24ふかくさ	24ふかくさ	33おほぬさ	33おほぬさ	
25あねはのまつ	25あねはの松	21夢うつゝ	21夢うつゝ	
26はなたち花	26花たち花	22あさきへ	22浅き江	
27わすれ草	27わすれ草	39しほなりの山	39しほなりの山	
28しほがまの浦	28しほがまの浦	37みけしのころも	37みけしの衣	
29わがかよひぢ	29我かよひ路	32千いろのたけ	32ちいろの竹	
30八はし	30やつはし	13むさしの	13武蔵野	
31すみだ川	31すみだ川	36仁和の中将	36仁和中将	
32ちひろのたけ	32千ひろの竹	35しのぶずり	35しのぶずり	
33おほぬさ	33おほぬさ	38みやこ人	38みやび	
34つくもがみ	34つくもがみ		24深草	
35しのぶずり	35しのぶずり	26はなたち花	26花橘	
36仁和の中将	36仁和の中将	42くたかけ	42くたかけ	
37（みけしのころも）	37みけしのころも	30やつはし		
38みやひと	38宮人	24ふかくさ		
39しほなり山	39しほなり山	40ふじのさは		
40ふぢのなるさは	40ふじの嶋さは	41あさの袖	41あさの袖	
41あさのそで	41あさの袖	43たまつしまの明神の御つかひ	43玉津島の御使	
42くたかけ	42くたかけ	44みやこをはなれず	44都を離れず	
43玉つしまの御使	43玉津嶋のつかひ	45とうせんだうの名所	45東海道名所	
	・女はらから			

44宮こをはなれず	・色ゆるされたる女房	46さいかひだうの名所	46西海道名所	
45あづまのかたの名所	44みやこはなれず	47あづまへゆかざるを	47あづま路にゆかざるを行くといふ	
46さいかいだうのめい所	45とうせんだうの名所	ゆきたると	48化身たり	
47あづま路にゆかざるを行	46さいかいだうの名所	48化身たり	49最後に歌書きし事	
48なりひらを大日のけしむと	47あづまへ行ざるを行と云	49さいごの歌かきをきし事		
49さいごのときの事	48業平大日けしん	・みやこどりといふべきに		
・千はやぶるといふ事	・うゑかうぶり	27わすれ草		
	・かりにいにけり	・しほがまのうら		
	・しのぶずりのころも			
	・みづ行川のくもでなれば			
	・三代の御門			

（時雨亭文庫蔵本の項目順に通し番号を付け、同一の内容を持った項目には同じ番号を付した。一本のみの固有の項目は番号を省いた）

以上のように項目の有無やその配列に、それぞれ相違がある。このことに基づいて諸本の性格を次にようなことが考えることができる。

・「8なかめくらしつ」までの配列は、冒頭箇所の欠落を除いては、諸本の配列がほぼ一致しているが、ここから後の配列は、時雨亭文庫蔵本と山本登朗氏蔵本、天理図書館蔵本と桃園文庫蔵本がそれぞれ近く、二系

統に大別することができる。

・鉄心斎文庫蔵本他の諸本と比較しておよそ半分の分量しかなく、本来上下二冊本であったものの下巻が失われたものである可能性が高いと考えられるが、これが原初形態であった可能性もある。現存形態で見る限りは、「12とぶほたる」から「23たのむのかり」までの配列は天理図書館蔵本・桃園文庫蔵本とほぼ一致している。

・時雨亭文庫蔵本と山本登朗氏蔵本は「43玉津嶋の御使」まで、天理図書館蔵本と桃園文庫蔵本は「49さいごの歌かきをきし事」まではほぼ項目の配列が共通しているが、これより後は同一系統の中でも項目の出入りが大きい。末尾の箇所にこうした特徴が見られることから、諸本がそれぞれ独自の増補を行ったものと考えられる。

三　『伊勢物語難儀注』の注釈

『伊勢物語』の各章段の記述は現実の出来事を虚構化・朧化したものであるという認識を前提として、この章段の出来事は実は何年何月何日のことなのだ、この「女」は実は誰々のことなのだというようにはっきりした根拠もなく日付や人物を特定したり、東下りは実際には東国へ下ったのではなく東山、あるいは長岡へ籠居していたのだとか、「筒井筒」とは男女がともに五歳（いつつ）の時の物語だというように、現代の我々の目から見れば、時に荒唐無稽、強引付会の説明を持ち出し、物語に描かれていない真実を明らかにしようとする姿勢は、『和歌知顕集』（以下、『知顕集』）やいわゆる「冷泉家流伊勢物語抄」（以下、「冷泉家流」）をはじめとする鎌倉時代の注釈に共通の特徴であるが、『伊勢物語難儀注』（以下、『難儀注』）にも、具体的な日付については言及しないものの、同様の特徴が見られる。ただし、個々の注釈内容については『知顕集』や「冷泉家流」とはかなり異なっており、物語中の登場人物にあてられる実名も、物語中に人物を特定できる根拠がある場合を除いて、多くの場合一致しない。

たとえば、「21夢うつゝ」の項では、「夢うつゝとは世人さだめよとは、彼御ともにありし少はらはといふは、よ人のまへとて上わらはなり」と、『伊勢物語』第六十九段に登場する「小さき童」を「よひとのまへ」という名の童とし、それ故「よひとさだめよ」と歌に詠むのだとするところまでは『知顕集』や「冷泉家流」と一致しているが、「よひとのまへ」が実は誰であるのかという点については、『知顕集』が幼時の伊勢、「冷泉家流」が大和守平豊名女とするのに対して、『難儀注』では、「小さき」というところからの連想か、「是は、なりひらがいもうとのわか草といひしが、斎宮へまいりて、世人のまへといふ也」と、第四十九段に登場する妹が「よひとのまへ」なのだとする。この例などは、『難儀注』が『知顕集』や「冷泉家流」と比較して特に無理な注釈をしているわけではないが、次に挙げる「41あさの袖」では、『難儀注』の強引さが目を引く。

むかし、かよひける女のもとへ、さまざまにかよひけるを、をふな、うらみて、此歌やる。

秋のゝのさゝはくるあさのそでよりもあはでぬる夜ぞひちまさりける

これを男きゝて、あはれとおもひて、其後、折々かよひける。これは、をのゝ小町がむすめ、たまこが事也。返し、男、

あさみこそ袖はひつらめなみだ河身さえながるときかば資まむ

『伊勢物語』第二十五段では「男」の歌とされ、『古今集』でも業平の歌とされる「秋の野に」の歌を小野小町の娘「たまこ」の歌だとし、さらに『伊勢物語』第百七段、『古今集』のいずれにおいても藤原敏行の「つれづれのながめにまさる」の歌の代作返歌としている「あさみこそ」の歌を、「あさ」「袖」の語の一致からか、強引に第二十五段の「朝の袖」の歌に結びつけている。『知顕集』や「冷泉家流」が、虚構化・朧化されて隠されている真実を明かそうとはするが、基本的に『伊勢物語』の記述と事実において対立する注釈を加えているわけではないのと比較すると、『難儀注』の注釈態度は同時代の注釈の中でも独特のものであるといえる。また、『古今集』に記された作者名を無視するばかりではなく、「秋のゝのさゝはくる……」と、定家本系の『伊勢物語』にも『古今集』にも異なる本文を用いている（同様の例は『難儀注』の中では数多い）ことも、この注釈がどのような場で流通していたのかを考える上で重要であると言える。

このような『難儀注』の注釈態度は、業平の没年に関わる記述にもはっきり現れている。『知顕集』、「冷泉家流」がともに、天長二年（八二五）出生、元慶四年（八八〇）五月二十八日没、五十六歳として、『三代実録』にも記された業平の没年に矛盾のない記述をしているのに対し、『難儀注』では「1業平氏文の事」に「てんちやう二年に、はじめてしやうず」「八十よにてうせをはりぬ」とあって、没時の年齢を「八十よ」としているために、この記述に従えば、業平は十世紀の初め、『古今集』撰進のころまでは生存していたことになってしまう。なお、業平の没年に関しては、史実との相違だけではなく、『難儀注』自体においても齟齬が見られる。「1業平氏文の事」の項では、前記のように天長二年出生、十世紀初めに八十余歳で死去ということになるが、「49さひ後之時之事」の項では、「なりひらは、八十よにて、ぐわんぎやう二年のとし、はかなくをはりしに」とあり、こちらに従えば業平は八世紀末の出生、元慶二年没ということになる。このような『難儀注』内部での注釈の齟齬は他の箇所にも見られる。「30八はし」では「是は、誠のみ川の八はしにあらず。都より東へゆくをば、あづまへ行といふなり。ひがしとかきてあづまとよむ故なり」とあって、東下りは東国へ下って行ったではなく都から東へ行ったこととするのに対し、「47あづま路にゆかざるを行といふ事」では「ながをかのふるさとに、はゝのをはせし所に、うちこめられたるといふ事」とあって、こちらに従えば東下りは都の西にあたる長岡へ籠居したことになる。都より東へ行くという注釈は東下りを東山への籠居とする「冷泉家流」の注釈に近く、長岡へ籠居したという注釈は『知顕集』にも見られる。『難儀注』が『知顕集』と「冷泉家流」の双方の影響を受けていることも内部で矛盾の生じる一因であると考えられるが、ここでとりあげた『難儀注』の矛盾が「47あづま路にゆかざるを行といふ事」、「49さひ後之時之事」という、時雨亭文庫蔵『難儀注』の末尾にあたる箇所で生じていることは、前記したように末尾の箇所で『難儀注』の諸本に大きな異同が見られることを考え合わせると、『難儀注』の現存諸本の生成過程を考える上でも重要な問題となる。

『難儀注』の注釈は、『知顕集』、「冷泉家流」の双方の影響を受けながら、これらとは異なった注釈を示そうとするところに大きな特徴があると言える。そのために荒唐無稽といわれる『知顕集』、「冷泉家流」以上に怪しげな説が提示されることもあるが、『知顕集』、「冷泉家流」という、当時の代表的な注釈とは異なった『伊勢物語』の享受のあり方を示すものとして、興味深い資料と見ることができる。

注

（1）片桐洋一『伊勢物語の研究［資料編］』（昭和四十四年、明治書院刊）に翻刻。
（2）天理図書館善本叢書『和歌物語古註続集』（昭和五十七年、八木書店刊）所収。
（3）松原一義「『伊勢物語秘注事』の解説と翻刻――東海大学附属図書館桃園文庫蔵本――」（『古代中世文学研究論集』三、平成十三年、和泉書院刊）に翻刻。
（4）『鉄心斎文庫　伊勢物語古注釈叢刊　九』（平成十三年、八木書店刊）所収。

（片桐洋一・鈴木隆司）

4 『伊勢物語髄脳　弘安五年奥書』（鉄心斎文庫蔵）

一　書誌と内容

鉄心斎文庫には『伊勢物語髄脳』の写本が二部ある。一部は宮田和一郎氏（衣笠文庫）の旧蔵本で、江戸時代中期の書写。「未刊国文古註釈大系」に翻刻された刈谷市立図書館本や、その末尾部分を欠く神宮文庫林崎文庫本（片桐洋一編『伊勢物語の研究［資料篇］』に翻刻）と通ずる点が多い。それに対して、ここに翻刻した本は、刈谷図書館本と同じ奥書（二一四頁上段）の後に、「伊勢物語大灌頂以後秘々中書」と端作りし、「口決　次第不同」（二一五頁上段）が始まり、それが終る二一八頁上段には「弘安五年十二月十日」という奥書がある。続いて二一九頁から「伊勢物語系図」が始まる。さらに二二五頁から二二六頁までは「『伊勢物語』ニ（入ル）『万葉集』歌十八首」と「『伊勢物語』に入被侍古仙抄歌十首」が位置する。これは、他本にはない大きな特徴である。

この本は、縦二四・〇糎、横一八・〇糎の袋綴一冊本。渋色の紙表紙に外題はない。料紙は楮紙。一面十行、和歌は二行に書く。室町時代末期の書写で、知られている『伊勢物語髄脳』の写本では最も古い。

第一丁のオモテから墨付き、まず内題として「伊勢物語髄脳」、次の行に「右近中将在原朝臣滋春謹序」と記し、在原業平の息在原滋春を著者とした、いわゆる仮託書であることを、歴然とさせている。

本文は、まず、総論として、人間を始め、森羅万象、すべて男女の和合から生ずるものであり、『伊勢物語』

とは男女の物語の謂であり、男女の和合を最も尊しとするものであると説き、父在原業平の言に従って、以下に七箇条の髄脳を記すと言い、続いて業平の遺言と称する「しるや君われになれぬる世の人のくらきにゆかぬたよりありとは」（二〇四頁下段）という歌こそが、「やみにたどらず、実の道に縁を結ぶ」要諦として詠まれたのだと説き、「我流」おいて「『伊勢物語』をつたえん人は」、「ゑぼし・直垂に、青き衣を着せた」業平の影像を描き持つとともに、あわせて枕の上に若紫の女（初段の姉妹）の姿を描くならば、みずからの和合も疑いなき由を述べるのであるが（二〇四頁下段）、この「しるや君われになれぬる…」の歌は、『玉伝深秘巻』（注1）の「中将入滅記」に見える「しるらめやわれにあひみし世の人のやみぢにゆかぬたよりありとは」の異伝と言ってよいものなのである。

続いては、髄脳の各論ともいうべき「深秘（秘々）第一」（二〇四頁下段）から「深秘第七」（二〇七頁上段）までを列記するが、たとえば、その第一に（二〇四頁下段）「男女交会の時、ともに融同して、互に一念を合成の時、業を結び、共にまよふ時は、ともに輪廻のごうを結ぶ。共に悟る時はいよ〳〵仏用をほどこす。たゞ覚人と迷人と和合する時、閉開互に一となりて、五行四大、心相共に融同して、二人のこの念々、吉と成通して、一念を合成の時、覚人思ふべし、此合成は、これわが合成にあらず、人の合成にもあらず、天下万像五行四大、皆伊勢也。さるを、われはさとり、人はまよひ、しるとしらざるとばかりなり。いま、わがうのとき、まよひの心、他念なくして、覚るもまよふも、吉と思へる一念を和合して合成す。もとより、皆、和合なれば、此和合の時、覚心一になり、通して合成する時は、もとよりなく、いせの本有常住の和合也。まよへる心、さとりの心、一になして、仏の種をきざし、実のさとりに縁を結ぶ也。これ、真実のいせの髄脳也」と述べているのをはじめ、男女の和合合成の時にこそ、無念無想の中に、生死を超えて悟りをひらく由を述べ、七箇条にわたる『滋春の髄脳』を終わる（二〇七頁下段）。

ここまでを見ただけでも、この『髄脳』が真言立川流の立場に立った『伊勢物語』の秘伝書であることははっきりしているのであるが、その特徴はさらに顕著になってゆく。

すなわち、次には「千葉破（ちはやぶる）と云事」と題する秘伝が続くのであるが（二〇七頁下段）、これは、歌語「ちはやぶる」が、実は母の胎内にいる人が、蓮の葉にも似た母の五臓六腑を蹴破って現れる、つまり千葉の体を破って生まれることを言うと述べ、「いかなる人か、ちはやぶらぬ人有べき。いかなる人か父母（の）和合より出こぬ人有べき」（二〇八頁下段）と述べ、男女の交会時の和合の功徳を説き、悟りの根本は、まさしくそこにあり、「伊勢」の「伊」は「女」を表わし、「恵」を表わし、「胎蔵界」を表わす。そして、「勢」は「男」を表わし、「智」を表わし、「金剛界」を表わすというように、まさしく真言立川流に依拠したこの秘伝を述べ終わる（二〇九頁上段まで）。

続いては、「伊勢の二門極理灌頂撰『阿古根の浦の口伝』物語云」と端作りして、「太政天皇住吉へ御幸なり給ふと云は、文徳天皇天安元年正月十八日、『長能が記』に…」と記す。「伊勢の二門」とは、言うまでもなく、「伊」は「女」、「勢」は「男」という立場に立った伝授であることを示しており、その伝授の最終段階に至って特別に与えられる「灌頂伝授」なのであるが、内容は、「昔、みかど、住吉に行幸したまひけり」で始まる『伊勢物語』第百十七段の口伝であり、『玉伝深秘巻』が伝える二種類の「阿古根の浦の口伝」（注2）と深くかかわっている。

『玉伝深秘巻』によれば、「阿古根の浦の口伝」は在原業平が住吉大明神から拝受して一子滋春に相伝したものとされており、滋春が書き留めたというタテマエになっている『伊勢物語髄脳』としては、当然伝えなければならぬものであったが、果たしてそれだけに、たとえば「阿古根の浦」は「とつぎの浦」のことであるとして男女の交合・和合を正面に据え、男女の和合による出生がこの秋津嶋の創生の根本を象っているという立場から、『玉伝深秘巻』が伝える藤原為頭流の「阿古根の浦の口伝」を焼き直しているのである。

ところで、このように秋津嶋の創生の根本を象っていると述べる過程において注意されるのは、早く大津有一氏が指摘しておられるように(注3)、この部分に、「世継本文」と称して「水鏡」が引用されていることである。

すなわち、本書二一一頁上段に、

抑、吾秋津嶋のおこりを尋ぬれば、『世継』の本文に書記天神七代、地神五代と云事、天神の始、国常立尊より空中に住て此国に来らずとしるせり。

とあるが、これは、前田家本『水鏡』（『国史大系』所収）の冒頭に、

天神七代

第一、国常立尊、男。第二、国狭槌尊、男。第三、豊斟渟尊。

已上三代。あめつちはじめてひらけて、空の中に物あり。かたち、あしかびのごとし。即、神となれり。これ世の始なり。

とあるものを要約したと思しく、また二一二頁上段に、

『世継』本文云、

伊奘諾・伊奘冉二神、天のうき橋のもとにして、たばかりての給はく、此下にもし国なからんや、とて、天のさかほこをさしおろして、あをうな原をさぐるに、其ほこのしたゝり、こりかたまつて一の嶋となる。空中に物あり。体あしかびのごとし。二神、其嶋におりゐて、妻と成給ふ。先、大八嶋をつくり、次に草木を作、次に日月を作、次よろづの人のふるまひをつくり、其後に天照をうめると云。

とあるのも、『水鏡』に、続けて、

第七、伊奘諾尊、男。　伊奘冉尊、女。

已上一代、二神、むかし、あめのうき橋のうへにして、ともにはかりて、いはく、このしたに、あに国なからんやとて、あめのにぼこをさしをろし、さぐり給に、あをうなばらあり。そのほこのしたゝりのうしほ、こりかたまりて一の嶋となれり。二神、その嶋にくだりて、夫婦となり給。まづおほやそじまの国をつくり給。次に山嶋海川をつくりたまふ。又草木をつくり給ふ。さて又世中のあるじたるべき物なからんやとて、一女三男をうみたまふ。いはゆる日神、月神、蛭子、素盞烏尊、これなり。

とあるのに依拠していると見てよかろう。

さて、ここで注意すべきは、藤原為頭がその成立にかかわったかと思われる『玉伝深秘巻』の「阿古根浦口伝」を、みずからの立場からまとめあげていた前述のケースと同じように、『水鏡』の本文をこのように引用した後、すぐに続けて「鉾のしたたりは、男の嬬を云なり。こりかたまるとは、女の嬬に和合して、子の種と成行を云也」（二一二頁下段）というような、まさしく真言立川流の立場からの解釈を加えていることであるが、このような真言立川流の特徴は、以下に付加されている別紙の秘々口決において特に著しいのである。

二　秘々口決と真言立川流

拙著『伊勢物語の研究［研究篇］』[注4]では、

伊勢物語髄脳

右物語髄脳、極秘深重肝心也。努々短慮之愚人、我慢之迷人等不可伝受之。背此掟者ハ、可蒙神明皈罰者也。

返々輙不可有他見之由取定置也　　権中将在原朝臣滋春

という奥書で終わる未刊国文古注釈大系所収本の系統（ただし未刊国文古注釈大系所収本は、右の奥書の「取定置也」から「権中将在原朝臣滋春」までを欠く）を普通本とし、奥書を含む末尾部分を持たない系統の本として神宮文庫所蔵宮崎文庫本を紹介翻刻したのであるが、鉄心斎文庫所蔵のこの本は、この奥書に続けて、さらに

伊勢物語大潅頂以後秘々中書

口訣　次第不同

と端作りして（二一五頁）、別紙口伝が続いている。その内容は、まず、

伊勢二字事、先漢字につきて沙汰せば、い(伊)の字は、われ人と書り。予と云作の字也。人は篇の字也。男女定恵和合之儀也。金剛界の両部也。勢字は、丸也。力を生とかけり。丸なると云は、胎内の五位の中に、最初伽羅藍の体、赤白二滴和合して子門にやどる時は、満月の体也。力上者は、十如是の中の、第四の力の用をえて、産門よりくだるを、生ると云也。

（二一五頁上段）

という文に始まり、

定・恵事、定は左、恵は右。定は胎蔵也、恵は金剛界也。定は東、恵は西。定は女、恵は男。定は心、恵は色。定は観音、恵は勢至。定は不動、恵は愛染王。不動は女、愛染は男也。女は開也、男は閉也。開𑖀字也。閉、𑖁字也。𑖀字の精、赤色也、迷て無明也。𑖁字の精、白色也。法秘也。此無明と法性と和合して、三世諸仏を作出也。されば、母が腹の内にて、父母所生身即証大覚位云。故に煩悩即菩提生死、即涅槃無明、即法性、法性即無明読也。是、則、地、水、火、風、空の五行の体と云は、五穀の精也。秘べし〳〵。

（二一六頁下段）

という結びの文章に端的に示されているように、『伊勢物語髄脳』の本伝以上に、真言立川流の立場が強く示されているのである。

真言立川流については、最近、関心が高まっているが、詳細は未だ不明な点が多い。[注5]しかし、要するに、陰陽道の影響を著しく受けた真言密教の一派であって、その教義は、真言密教の根本をなす大日如来の金胎二部を男女の性にあてはめ、大日如来の智の世界を表わす金剛界は一切の煩悩を破壊するほどに堅固であるゆえに、まさしく男に相当し、「骨」に相当し、従って「白」を表わすのに対して、胎児を母胎に育む胎蔵界はまさしく女に相当し、その柔らかさのゆえに、「肉」に相当し、従って「赤」を表わす。かくして、女性の赤肉より生ずる赤滴と男性の白骨から生ずる白滴の二水が交接和合する一瞬、人間が生ずると説くのであるが、ここまで述べて来ると、この別紙口伝の「赤白二滴説」は勿論、既に述べて来た『伊勢物語髄脳』の本伝の場合も、まさしく真言立川流による『伊勢物語』理解であったことを、誰しも認めざるを得ないのである。

「伊勢物語大潅頂以後秘々中書　口決」（二一五頁上段）と題した潅頂伝授が終わった後に、さらに特定の人物

に口移しで伝授するこの秘々口決は、二一八頁上段の「弘安五年十二月十日」の日付が入った起請文によって、一往終わり、次丁（二一九頁）からは『伊勢物語』に登場する人物の系図となる。

前に、この『伊勢物語髄脳』が、藤原為顕が関与したと言われる『玉伝深秘巻』に依拠しながらも、それをみずからの立場にふさわしく換骨奪胎していると述べたのであるが、ここでも、同じ関係が『玉伝深秘巻』との間に見られる。

たとえば、二二〇頁の業平の系図に、業平の子として棟梁・滋春をあげるのはよいが、実際は孫である元方が記されていたり、業文という存在を知られていない息子の名が見えたりするのが特徴的であるが、特に目を引くのは、「石見女王」という娘の名が記されていることである。これは、「日本歌学大系」に収められている『石見女式』の作者とされている石見女に関係があるのではないかと思われるのであるが、注意すべきは、その『石見女式』が、前述した『玉伝深秘巻』と内容的にかかわりがあるという事実である。(注6) そして、そのように見てくると、この系図全体が、やはり為顕流と深い関係にある「冷泉家流伊勢物語注」の類と重なる点を多く持っていることが納得されるのである。

今、その一例をあげると、本書の二二二頁上段に「藤原良門女、有常妻。調五の女の母也」とあるのは、本大成第一巻所収の『十巻本伊勢物語注』の第一〇段の注に「母ナン藤原ナリケレバトハ、彼女ノ母、有常ガ妻ハ、中宮大夫藤原良門ノ娘、忠仁公ノメイ也」とあり、第二三段の「つつゐづつ…」の歌の注に「ツヽイツヽトハ、共ニ五歳也。ツヽトハ、調ノ義也。『大平御覧』ニ云、堯舜大宗ノ御代ハ、政道共ニ調也ト云リ。又、『論語ノ注』ニ云、五常の調ル時ハ、三事孝アリト云リ。三事トハ、父ニ事、君ニ事、兄ニ事フル也。サレバ、ツヽ五ト

ハ、共ニ五ト云義也」とあるように、「調五ノ女」（ツヅイツツ）、すなわち「井筒の女」と呼ばれた有常娘の母を、史実に反して「藤原良門女」としているのは、まさしく『十巻本伊勢物語注』などの「冷泉家流伊勢物語注」の類の所説によっているのであり、同じく二二二頁上段に「清和天皇、富士の山ニたとうる人」とあるのも、『十巻本伊勢物語注』の第九段に「富士ノ山ヲバ、王ノ位ニタトヘ、業平ガ身ヲ比叡山ニタトヘテ、其間ノ位、二十重ノハタチバカリト云也。業平此時ハ従四位下左近中将也。此時中将ハ不審也。従四位ヨリ太政天皇マデ廿重也。従四位下上、正（四）位下上、已上之殿上人、従三位下上、二位下上、従一位、正一位已上公卿、一品、二品、三品、四品已上親王、春宮、中宮、当帝、太政天皇已上即位、以上廿重也。ソノ山トハ、清和ヲ申也」とあるのに依拠しているのである。

しかし、一方、この系図のすべてが「冷泉家流伊勢物語注」の類に依拠しているわけでないことも知っておかなければならない。たとえば、二二二頁下段に「氏子内親王 淳和御子、斎宮、長岡ノトナリノ宮原ト云尊也」とあり、「式部大夫平敦成娘 長岡にて業平の家にあつまる女也」「伯岐守源三階娘 長岡にて業平の家に」とあるが、「冷泉家流伊勢物語注」の、たとえば『十巻本伊勢物語注』には、「嵯峨天皇ノ御娘、生子内親王」「伯耆守藤原隆成娘伯耆局」「民部大輔三善成房娘大輔ノ局」とあって、異なっている。また二二二頁下段に「章子 良房女也。業平ヲ恋テ死シ人也」とあるが、「冷泉家流伊勢物語注」に属する『増纂伊勢物語抄』の第四十五段の注には「良相左大臣娘、円子」とあって、これも異なっている。

これを要するに、この系図に示されている『伊勢物語』理解の根本は、鎌倉時代から室町時代中期にかけて最も重用された「冷泉家流伊勢物語注」の流れに属しながら、細部にあっては、かなり独自性を持つものであった

と言えるのである。

今までも、機会あるごとに述べて来たことであるが、鎌倉時代から室町時代中後期に至る間の『伊勢物語』の相伝と享受は、おおむね「冷泉家流」と総称し得る古注の説に依拠して行われて来たと言ってよいのだが、その一つ一つを子細に見ると、細部においては、かなりの異なりが見られる。つまり、あまりに他と異なっていては一般性がなく、たとえば連歌の場や謡曲の制作に活用できないが、逆に他説とまったく一致していては、「秘伝」として伝授する意味がない。本大成の第一巻に収めた『十巻本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』という三種の古注が、いずれも、「冷泉家流古注」と総称される系統に属しながら、そのそれぞれが独自性を持っていたのも、だから当然のことだったのであるが、今、問題にしている「系図」の場合も、同じことが言えるのである。

「系図」の次には、『伊勢物語』に見える「『万葉集』歌十八首」（二二五頁）と『伊勢物語』に入っている古仙抄の歌十首」（二二六頁）を掲げるが、系図の場合と同じように、きわめて特異な情報が記されている。

たとえば、二二五頁の第十四段「夜も明ばきつにはめなでくたかけの…」、「くり原やあねはの松の人ならば…」の二首や、第十五段の「忍山忍びてかよふ道もがな…」などは、『万葉集』の歌ではないのに、「万葉集歌十八首」に入っているし、二二六頁所掲の第七段の「いとゞ敷過行方の恋しきに…」（『後撰集』所載）や、第六十段の「五月待花橘の…」（『古今集』所載）、第六十三段の「狭筵に衣かた敷…」（『古今集』に類歌あり）が、「古仙抄」「古仙集」と称する「人丸家集十巻」に入っているというように、いわゆる「冷泉家流古注」や『玉伝深秘巻』などとも異なる特異なまとめがなされているのである。

三　真言立川流と『伊勢物語髄脳』の成立時期

特異な注釈書や秘伝書が多い中世においても、『伊勢物語髄脳』が特異過ぎるほど特異なものであることは、以上のように歴然としているのであるが、その成立の時期は果たして何時の頃であったのだろうか。

既に具体的に述べたように、『伊勢物語髄脳』は、前田家本『水鏡』を引用しているのであるが、増田宗氏[注7]が説くように、前田家本系統の『水鏡』は、鎌倉時代中後期に改作されたものであることに加えて、藤原為家の息である為顕の流の秘伝の集成とされる『玉伝深秘巻』所収の「阿古根浦口伝」や「口中深存義」「中将入滅記」などを前提にしていることを考えれば、この『伊勢物語髄脳』の成立時期は、鎌倉時代ごく末期というよりも、南北朝時代から室町中期頃までに求められるのではないか。

もっとも、「伊勢」の二字の真義を真言密教の金胎両部をもって説こうとする動きは、前述した『玉伝深秘巻』所収の「口中深存義[注8]」に、

抑、伊勢物語トハ、両部ヲ伊・勢ノ二字ニツクリテ、真言の胎金ノ義ヲ男女ノ道ニツクリナスナリ。伊トハ、胎蔵界也。伊トハ万法ヲ納テ諸法ヲ一如ト知者也。サレバ胎蔵界ニハ七百余尊ヲコメテ一法トス。サレバ、伊ヲバ、オサムルトヨメリ。勢トハ金剛界也。勢トハ、タネヲマクト云ヨミアリ。金剛界ハ種子、三摩耶形也。サレバ、金剛界ニハマラズナリ。以此義、真言一大宗ノ両部ヲ、伊勢ノ二字ニツクルナリ。

とあるように、鎌倉時代の中後期からあったと見てよかろう。しかし、前述したように、それを男女交会という局面に具体化し、「赤白二滴」などの立川流独自のキーワードを頻用しつつ説く『伊勢物語髄脳』の内容は、こ

れらとは全く次元を異にすると言ってよいのではないか。

このように見れば、『伊勢物語髄脳』の成立は、先蹤になった『玉伝深秘巻』所収の秘伝の成立よりかなり後、つまり南北朝期、おそらくは室町時代に入ってからと考えられてくるのであるが、それはまさしく、後醍醐天皇の格別の信認を得て、東寺の一の長者にまでなって、真言立川流中興の祖と言われた文観の時代、もしくは文観の影響が著しかった時代に相当するのである。

文観（弘真）の事績については、岡見正雄氏の小さな大著ともいえる角川文庫の『太平記』の第二巻補注（十二～九）に詳しく、また網野善彦氏の『異形の王権』（平凡社、イメージ・リーディング叢書）などにも触れられているように、文観と後醍醐天皇の力を無視しては、当時の真言立川流の著しい流行を説明することができない。前述したように、真言立川流の立場に立ったというよりも、古典文学の中で最も多くの読者を持つ『伊勢物語』によって真言立川流を説こうとしているかに見える『伊勢物語髄脳』の成立基盤も、文観の周辺、あるいは文観の影響を著しく受けた人々の世界に求められるのではないか。秘伝という、それに適した形式をとっていても、これほどまでに鮮烈な主義主張を持った『伊勢物語髄脳』が成立し流布した背景には、世に許された真言立川流の大流行があったと想定するのが、むしろ自然ではないかと思われるからである。

実際、『玉伝深秘巻』や、前田家本『水鏡』の影響に加えて、このような真言立川流の大流行の時期を勘案するならば、『伊勢物語髄脳』の成立時期は、やはり後醍醐天皇の建武年間（一三三四―一三三六）以降としなければなるまい。そして、そのように考える場合に問題になるのは、前述した付録部分の「大灌頂以後秘々中書」の最後に置かれた起請文の末尾（二一八頁下段）に見える「弘安五年十二月十日」という日付が全く仮託のものになってしまうことである。しかし、そもそも、この『伊勢物語髄脳』自体が、在原業平の一子滋春に仮託された仮託書であり偽書であることを思えば、この「大灌頂以後秘々中書」の部分を含めた『伊勢物語髄脳』の相伝も、弘安五年（一二八二）に仮託されていたとして不思議ではない。

鉄心斎文庫本だけにある「弘安五年」という年号の信憑性はこのように疑われるのであるが、しかし、仮託かと思われる年号を含めた、灌頂以後の口決や系図を併せ持つ伝本は他になく、ここに底本にした鉄心斎文庫本こそは、まさしく、そのような「あやかしの世界」に生きた『伊勢物語髄脳』にふさわしい本であったということになるのである。

注

（1）片桐洋一『中世古今集注釈書解題 五』（昭和六十一年、赤尾照文堂刊）所収。
（2）『中世古今集注釈書解題 五』の五二六頁と五四五頁参照。
（3）『伊勢物語古注釈の研究 増訂版』三〇頁（昭和六十一年、八木書店刊）
（4）『伊勢物語の研究［研究篇］』（昭和四十三年、明治書院刊）
（5）真言立川流の始祖は、後三条天皇の第三皇子輔仁親王の護持僧をつとめ、親王の立太子を願って鳥羽天皇を呪詛した罪により、伊豆に流された仁寛であると言われている。
（6）三輪正胤『歌学伝授の研究』（平成六年、風間書房刊）の一〇八頁以下に詳しい。
（7）増田宗「水鏡―異本系の成立」（『国語と国文学』昭和三十四年九月号）
（8）注1および注4の拙著に紹介、翻刻した。

（片桐洋一）

片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

藤島　綾（ふじしま・あや）
1968年生まれ。九州大学大学院博士課程単位取得。主要論文「三条西家流『伊勢物語』注釈の一形態－支子文庫本をめぐって－」（「語文研究」第83号）「『闕疑抄初冠』考」（「語文研究」第85号）

神田裕子（かんだ・ゆうこ）
1970年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。早稲田大学大学院生。主要論文「河野美術館蔵『伊勢物語註　冷泉流』」（『王朝文学の本質と変容散文編』和泉書院）「『玉水』の作品研究」（「演劇映像」第43号）「古活字本「謡抄」単辺十二行本の書誌学的研究」（「演劇研究センター紀要Ⅰ Ⅲ）

鈴木隆司（すずき・たかし）
1970年生まれ。京都大学大学院博士後期課程修了。高知大学助教授。主要論文「在中将集の性質と成立（上）（下）」（『国語国文』67-2,3）、「伊勢物語享受の一側面－新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌－」（『国語国文』70-7）。

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第二巻

2005年（平成17）5月30日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社**笠間書院**
〒101-0064　東京都千代田区猿楽町2-2-5
☎03-3295-1331(代)　FAX03-3294-0996
振替00110-1-56002

NDC分類 913.32

ISBN4-305-70042-5 C3395
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。
http://www.kasamashoin.co.jp

藤原印刷・渡辺製本
（本文用紙：中性紙使用）